●シエナ・ウインド・オーケストラ・トロンボーン奏者
郡 恭一郎

トータルバランスが格段に良くなり、繊細な表現もできる。

レスポンスが良く相当に吹きやすい。音の純度も高くなった。

●NHK交響楽団トロンボーン奏者
吉川武典

吉川さん(右)は郡さんより学年にして二つ上。東京藝大と桐朋学園大で学校は異なるが、お二人は長い付き合いになるという。

アクシャル・フロー(AF)バルブの進化形を搭載した

バック Bach 42AFの魅力!

トロンボーンの新時代を先取りした ニューモデル

セイヤー・バルブを搭載したバックの人気モデル
「42T」に代わるものとして昨年5月に発売された「42AF」。
セイヤー・ユーザーの誰もが注目する
新開発・高性能バルブのインプレッションも含め、
N響とシエナで活躍する二人がその吹き心地を語る。

記事協賛:野中貿易株式会社、株式会社アクタス　写真:岡崎正人

——42AFの吹き心地は42Tとは当然異なりますが、お二人のファースト・インプレッションはどうでしたか?

吉川 とっても吹きやすくて良い楽器だと思いました。もちろん42Tとは違うけれど、バックはバックです。

郡 私の場合は、良い楽器を探していたところにこれが出て、吹いてみたらかなりピンと来るものがあったんです。気に入った楽器も見つかって、すぐに買いました。

バック遍歴を重ねて来た二人にとっての42AFは?

——お二人とも長いバックユーザーですよね。

吉川 ええ、それもいろんなモデルを浮気して来た(笑)。トラディショナルの赤ベルのライトウェイトから始めて、大学を卒業するころに赤ベルのセイヤーの出始めを買い、30代ごろからは黄ベルのトラディショナル、黄ベルのオープンラップ、黄ベルのセイヤーも吹いたりと。2〜3本ずつ買い換えたりもしているから、延べにすると10本以上のバックを吹いて来たんじゃないですか? で、今はどうかというと、普通のトラディショナル・モデル。振り出しに戻ったんですよ(笑)。

要するに、どれがどれよりも優れているというのではなく、その都度「あ、こっちの方が表現しやすい」とピンと来たものを吹いて来たんだと思うんです。だから、これからも僕は、それぞれのバリエーションを楽しみながらバックを吹き続けるだろうと思う。その中の選択肢の一つに今度の42AFも入って来たということですね。

郡 私もトラディショナルは結構長かったですね。シルバーの42Bを使ったり、赤のトラッドや黄のトラッドを吹いたり。ただ、トラッドのハイBbが自分には少し詰まり気味になり、セイヤーに変えるとオープンに吹けるのでセイヤーに変えたんです。でもセイヤーは最初、コツがよく掴めなくて。倍音の豊かさやピアニシモの吹きやすさはトラッドの方があると思うのだけれど、まわりがどうしてもセイヤーの流れになったでしょ。そのうちコツも掴めてきて長く使いましたが、楽器自体ちょっと古くなり、「どうしよう、ロータリーにしようか?」などと思っていたときに運良く42AFが出ました。今までの42Tよりもトータルバランスは格段に良くなったと感じました。

吉川 吹いた印象は、とにかくレスポンスが良い。息の通りも非常にスムーズで吹きやすい。相当吹きやすい楽器だよね?

郡 吹きやすいです。

吉川 音色的には透明度が高くなったというか、ドイツ管に感じるような音の純度の高さを感じます。と言っても、音は純度が高ければ良いというわけではなく、響きの豊かさや幅広さを出すためには「雑味」というか、いろんなものも混じった方がよくて、それがバックの響きの良さでもあると思うんです。42AFの音は、それが少し純度の高い方へシフトしている。それでもバックに変わりはない。非常にクオリティの高い次元の魅力を持っています。

郡 最近のバックに感じるのは、前にも増してどんどん品質が良くなっていることです。セイヤー・バルブにもそれは感じていましたが、42AFの場合、バルブのユニットも含めてすべてバックが作っているわけですね。トータルバランスが良くなったのはそのせいだとも思う。

Bach TenorBass Trombone"42AF"

F管の「カツラ」と呼ばれる抜き差し部分にリングが付き、支柱のネジが従来の真鍮からニッケルになるなど細かな違いが見られる。

新しく特許を取得したアクシャル・フロー・バルブ。グースネック（指さしている）が真っ直ぐに出ている。バルブのボトムにはベアリングが装着され、スムーズな回転と高い密閉性を実現、メンテナンスも容易にした。

たぶん、楽器の気密性が全体的に上がったんじゃないでしょうか。最初は少しタイトに感じるかも知れないけれど、音のツボは分かりやすいし、音ムラも少ない。F管も鳴りやすくて、ネックを抜いて調整する必要をほとんど感じません。

バックらしさを保ちつつ、これまで以上に繊細な表現も…

――セイヤーバルブの改良型や新しいロータリーバルブが出て来ているなかで、42AFの新バルブをどう評価されますか？

郡　息の入り方は前のセイヤーの方が太く、私の場合はちょっともっていかれる感じだったんですが、新しいバルブはちょうど良い感じで入っていく。どう聞こえるのか気になったのでホールで聴いてもらったら、よく音が通るし、きれいに聞こえるといわれました。ウォームアップに時間をかける方だったのが、おかげで短縮できるようにもなりました。

吉川　世の中がロータリーからセイヤーに向かったというのは、トロンボーンに限らず、たぶんすべての管楽器がストレスのない響きを目指した流れと軌を一にするものだったと思う。それが今、少し揺り戻しが起きている。それは、音がワイドになり過ぎて、自分の表現がしにくいと感じたり、物足りないと感じる人が増えて来たからかも知れない。

これからは、一方的に響きを広げる、あるいは一方的に響きをまとめるというかたちではなく、双方をバランスよく取り入れて演奏者の欲求を満足させられるようにバルブは発展していくと思うのですが、このバルブは正しくその進化形として出て来た印象がありますね。

郡　中にベアリングが入っていて、スムーズに回転しますし、メンテナンスも良いと聞いています。中のコマはアルミで軽い感じもしますが、ベアリングが入ったことで気密性が高くなり、非常にバランスが良くなったと思います。

他に細かなことを言えば、レバーのリンケージがプラスチックから金属に変わり、効率が良くなった。レバーのストロークはセイヤーよりも若干長いですね。

吉川　グースネックが真っ直ぐになった影響も大きいね。吹いた時のストレート感は増した感じがする。

――スライドも新しくなりました。

郡　内管の先端が、今までのはちょっと内向きになっていたのが、この楽器はストレートにスパッと切れています。昔のバックもそうでした。スライド・オイルは、ほんの少しつけるだけでよい。

吉川　むかし、内管の先端が狭くなっているのを知らなくて、「ここ広げたら息の通りが良くなるんじゃない？」と技術の方に言ったら、「狭くしているのは摩擦を軽減するためのもので、大変な技術を要するんです。どれだけ苦労して狭くしているかご存知ですか？」といわれてビックリしたことがあった（笑）。それをスパッと切っているんだから、他に工夫して摩擦を軽減しているんでしょうね。

郡　F管の「カツラ」と呼ばれる抜き差し部分にリングが付き、支柱のネジが真鍮からニッケルになりましたが、そのわりに音は硬くなっていません。抜差管の精度は、今までよりも断然良くなりましたね。それと、スライド先端に付くゴムはちょっと前から小さくなり、これだけでも音は随分変わりました。

ついでに言えば、ベルと本体を止めずにフリーにするのが今一部の楽器で流行っているんですが、42AFはきちんとベルを止めている。また、マウスパイプを着脱式にするメーカーが多い中で、相変わらずマウスパイプが固定されているのも私は気に入っています。こうした部分がきちんとハンダ付けされていることで響きの効率は良くなり、バックらしさが出ると思いますから。

――バックらしさとは？

吉川　フォルテで思いっきり感情を込められる、あるいは、全身で息を使って吹きたいという時にきちんと応えてくれる、頼もしい、懐が深い……。

郡　おっしゃる通りですね。それでいて42AFは、繊細な表現もいろいろ出来るようになったと思うんです。

――現在の42Tは42AFに取って代わられ、42Tは廃番になるそうです。

郡　とすると、バストロンボーンもこの新バルブが2個付くようになるわけですね。

音だけで選ばず、練習したくなるような楽器を選べ

――シエナ・ウインド・オーケストラで実際にお使いになってどうですか？

郡　吹奏楽では音量を出したり、吹きっぱなしだったり、音数も多かったりするので操作性の良さも求められるんですが、そうした使い勝手がとても良い。また、息の入り方が自分にとってぴったりなので、セクションの中で前ほど余計な神経を使って吹くことが少なくなりました。要するにとても合わせやすくなった。日本フィルで42AFを使っている藤原功次郎君に聞いたら、彼もまわりからの評判はとても良いと言っています。

吉川　僕はね、最近、音は広げすぎると駄目なんだろうなとよく思うんです。ストレスのないワイドな音で、音の空間や遠達性が拡がっていくのはとても魅力的なんだけれども、広がり過ぎると人間の感性がついていけなくなると思う。みんながストレスのないトマジやストレスのないダヴィッドを吹いたら、プレイヤーの個性は一体どうなります？　楽器の進化がプレイヤーの個性を追い越してしまったら危険ですよね。個性が表現できる楽器として留まっていてくれないと。

音を広げるというのは、空間の中で2次元方向に拡大する感じですが、理想としては3次元方向に、つまり、くっきりとした輪郭を伴って立体的に音がまとまる方向に進むべきだと思うんです。42AFはそうした潜在能力がとても高い楽器なんじゃないでしょうか。

郡　それでいて価格が安くなっているんですからね（笑）。

吉川　生徒によく言うんですよ。「こっちの方が太い音が出る」とか「ストレスのない音が出る」という音の印象だけで楽器を選んじゃ駄目だと。そうじゃなく、試奏するときは自分の得意なフレーズを吹いてみて、自分の気持ちを込めた時に応えてくれる楽器、練習したくなるような楽器を選びなさいと。

バックの「しっかりとフォルテが鳴る」「許容量がある」というのは楽器の個性ではなく、基本性能です。そこをしっかりと守りつつ、幾つかのラインナップを揃えてプレイヤーの個性に応えようとしている点が、僕がバックの好きな理由なんですよ。僕のように、自分の個性を考える以前に、バックのいろんなモデルの魅力に負けて浮気をして来た人間もいるけれども（笑）、バックの魅力に取り憑かれていることには変わりない。やはり、このメーカーが根本的に持っている思想とか哲学が素晴らしいんだろうと思いますね。■

郡 恭一郎 *Kyoichiro Kori*

桐朋高校音楽科および桐朋学園大卒。短期でフランスに学びイヴ・ドゥマールに師事。シエナ・ウインド・オーケストラ トロンボーン奏者及び楽団監事。アメリカンスクールinジャパンや東京ミュージック&メディアアーツ尚美の講師を歴任し、現在は昭和音大及び同短大、国立音楽院各講師。

吉川武典 *Takenori Yoshikawa*

NHK交響楽団トロンボーン奏者。東京藝大在学中新日本フィルに入団。第5回日本管打楽器コンクール1位、大賞受賞。1991年NHK交響楽団に移籍。1996～1997年文化庁海外派遣研修員としてベルリンへ留学。東邦音大特任准教授、東京藝大非常勤講師、高松第一高校中央講師。

音を広げ、かつまとめるという新しい発展のかたちを先取りした（吉川）

ホールで聞いてもらっても「よく音が通り、きれいに聞こえる」と…（郡）

スライド内管の先端が42Tではやや内向きになっていたのに対し42AFはストレートに切れているほか、ストッキング部分は目立って太くなっていない。